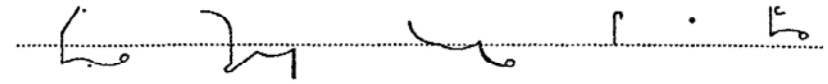
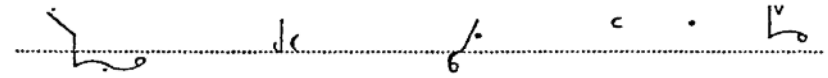


Pitman's Shorthand changes with the times

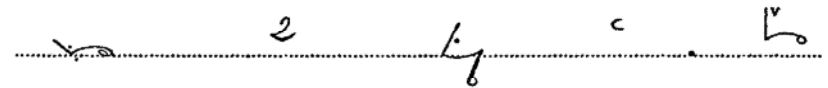
1837年 ステノグラフィック・サウンドハンド
父音は今と同じだが、その割り当てが違う。



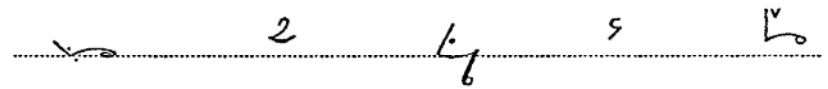
1840年 フォノグラフィ・セカンド・エディション (2版)
第1回の改良。父音は現在と同じ。



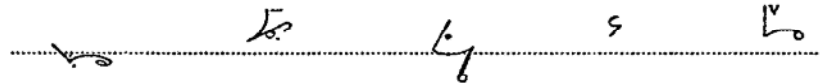
1857年 フォノグラフィ・テンス・エディション (10版)
現在の母音表記に変わった。



1922年 ニュー・イアラ・エディション
高速度速記者用に工夫された。10分間朗読で分速250語が試験で達成された。



1975年 Pitman2000エディション
ニュー・イアラの修正版。重要でない法則をやめ、学習負担を軽減、オフィス・ワーク用の適度な速さを用意した。



出典：兼子次生「アズ・ファースト・アズ・スピーチ」スピーチと同じ速さで（昭和55年5月）